

日语专业用书

简明 日本語 古文教程

◎梁海燕／编著



华东理工大学出版社



日语专业用书

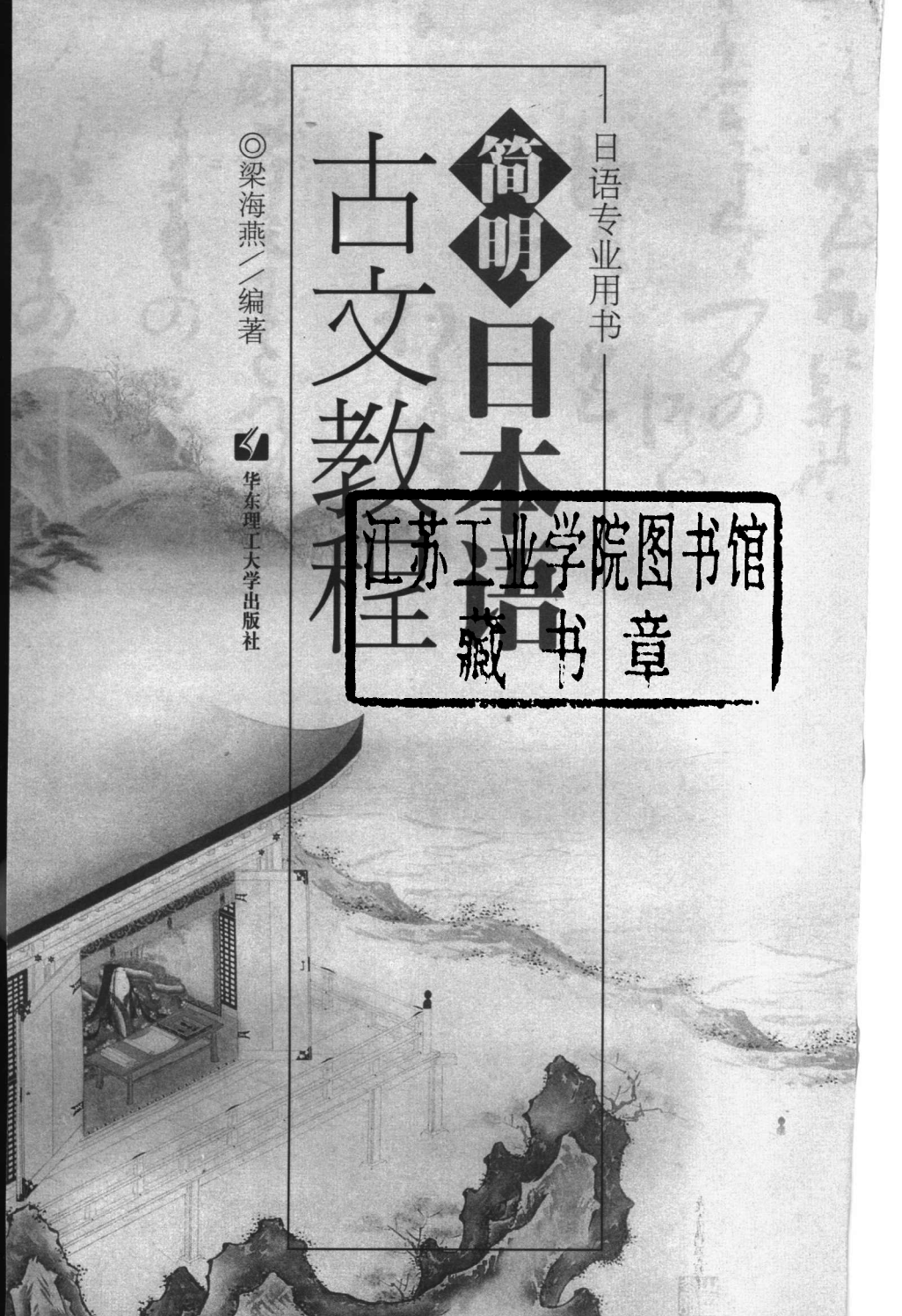
简明日本语
古文教程

江苏工业学院图书馆
藏书章

◎梁海燕 / 编著



华东理工大学出版社



图书在版编目(CIP)数据

简明日本语古文教程/梁海燕编著. —上海: 华东理工大学出版社, 2006. 9

ISBN 7-5628-1960-2

I. 简... II. 梁... III. 日语-古代-高等学校-教材
IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 101173 号

简明日本语古文教程

编 著 / 梁海燕

责任编辑 / 陈 勤

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社

地址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电话: (021)64250306(营销部)

(021)64252717(编辑室)

传真: (021)64252707

网址: www.hdlgpress.com.cn

印 刷 / 上海展强印刷有限公司

开 本 / 850mm×1168mm 1/32

印 张 / 13

字 数 / 262 千字

版 次 / 2006 年 9 月第 1 版

印 次 / 2006 年 9 月第 1 次

印 数 / 1-4 050 册

书 号 / ISBN 7-5628-1960-2/H·574

定 价 / 25.00 元

(本书如有印装质量问题, 请到出版社营销部调换)

序言

梁海燕さんは、私の懐かしい教え子の一人である。一九八九年四月、「北京秋天」の日本学研究中心に赴任した私は、才能豊かな学生達に恵まれ、平安朝文学や『源氏物語』を講義する日々であった。流暢な日本古典文の読みに、耳を傾けて聞き惚れる私は、ふと教室の窓外に視線を向け、此処が中国北京であることに愕然とした。

かかる優秀な学生の一人、梁さんが、この度『簡明日本語古文教程』を上梓され、中国の日本語学習者に対する古典入門の一助に―との事、私に「序言」を求めて來られた。喜んで一筆を呈するものである。

目次を閲するに、古典文法篇(全十章)、練習問題篇(全十章)、古典読本篇(全六章)から成り、付録として文語活用表を始め、古典文学史年表、練習問題解答まで整備されており、精密な判断のもと、適確な構成は、よく梁さんの人柄を示した出来映えといえよう。

日中友好を考える時、優れた一冊の古典入門書が、中国人学者により刊行され、幅広い層に読解される事で、その日中連携の絆の深さは、計り知れぬものがあるろう。どうか本書を手引として、中

国の數多い学習者が、一層のこと日本古典文学に関心を持ち、中国漢詩文と係わり深い「異国の世界」を読む楽しさを味わつて戴きたいと思う。

桜花爛漫の候の筆

甲南女子大学名誉教授

大槻 修

前言

本书是为日本语古文基础课程编写的大学日语专业教材，以帮助学习者在有限的课程时间内迅速掌握日语古文法框架，提高古文阅读能力。

本书由〈古典文法篇〉〈练习问题篇〉及〈古典读本篇〉三大部分组成。其中〈古典文法篇〉部分精选文法要点，引例说明，着重于助动词、助词的辨析，并在〈练习问题篇〉中配以相关练习，以供学习者进一步识别、理解和掌握。〈古典读本篇〉部分按日本文学分类，从和歌、俳句、物语、随笔、日记·纪行这几个主要文学体裁中精选名文片断，并配有作家·作品介绍、词语解释及现代日语译文。书后附有文语用言(动词·形容词·形容动词)活用表、文语助词·助动词一览表及古典文学史年表，以供学习者参考。

本书的特色在于：文法要点简洁明了，相关配套练习促使语法理论进一步巩固，佳篇名文选注赏析，集提高古典修养与鉴赏实用为一体。

本书在编写过程中，参阅了大量的书籍与辞典。日本甲南女子大学大槻修教授特意为本书写了序言并给予了热心的指导和帮助，在此谨致谢意。

由于时间仓促且水平有限，书中可能存有种种疏漏与不足，敬请读者批评指正。

编者

二〇〇六年六月

目次

古典文法篇

第一章	古典文法基礎	三
一	文語と口語	三
二	歴史的仮名遣い	六
三	言葉の単位	九
第二章	名詞	一八
第三章	動詞	二一
一	活用形とその主な用法	二二
二	活用の種類	二三
三	動詞の音便	三九
四	補助動詞	四〇

第四章 形容詞と形容動詞 四二

一 形容詞の活用とその種類 四二

二 形容動詞の活用とその種類 四六

三 形容詞・形容動詞の音便 四九

四 形容詞・形容動詞の語幹の用法 五一

第五章 助動詞 五三

一 助動詞の分類 五四

二 助動詞の種類 五七

第六章 助詞 九一

一 格助詞 九三

二 接続助詞 一〇〇

三 副助詞 一〇七

四 係助詞 一一二

五 終助詞 一二〇

六	間投助詞	一二五
第七章	副詞と連体詞	一二七
一	副詞	一二七
二	連体詞	一三〇
第八章	接続詞と感動詞	一三一
一	接続詞	一三一
二	感動詞	一三三
第九章	敬語の表現	一三五
一	敬語表現法	一三五
二	敬語表現の種類	一三六
三	注意すべき敬語表現	一四〇
第十章	古文の構造と修辞	一四五
一	文の構造	一四五
二	修辞法	一五四

練習問題篇

古典読本篇

第一章	記紀歌謠	二二七
	一 古事記	二二八
	二 日本書紀	二三八
第二章	和歌鑑賞	二四二
	一 万葉集(万葉の歌)	二四二
	二 古今和歌集(王朝の歌)	二五一
	三 新古今和歌集(中世の歌)	二六三
第三章	俳句鑑賞	二七〇
	一 貞徳の句	二七一
	二 宗因の句	二七二

三	西鶴の句	二七三
四	芭蕉の句	二七五
五	蕪村の句	二七八
六	一茶の句	二八〇
第四章		
	物語文学	二八二
一	竹取物語	二八二
二	源氏物語	二八七
三	伊勢物語	二九五
四	平家物語	三〇三
第五章		
	随筆文学	三〇八
一	枕草子	三〇八
二	方丈記	三一三
三	徒然草	三一九
第六章		
	日記・紀行文学	三二六

一	土佐日記	三二六
二	更級日記	三三七
三	紫式部日記	三四二
四	笈の小文	三四七
五	奥の細道	三五二

◎ 付録

練習問題解答	三六二
文語動詞活用表	三八五
文語形容詞活用表	三八六
文語形容動詞活用表	三八六
文語助詞の主な意味・用法・接続	三八七
文語助動詞活用表	三九一
上代の助動詞活用表	三九四
日本古典文学史年表	三九五

古典文法篇



第一章 古典文法基礎

一 文語と口語

1. 文語文法

今は昔、竹取たけとりの翁おきなといふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さかきの造みやつことなむいひける。

(竹取物語・生ひたち)

(現代語訳)今ではもう昔のこと、竹取の翁という者がいたそうだ。野や山に入って竹を取っては、いろいろなものを作るのに使ったそうだ。名前を、さかきの造と言ったそうだ。

この文章は、平安時代に書かれた(九世紀後半、今から千百年以上も前に書かれたと推定される)『竹取物語』の書き出しである。現代語訳と読み比べてみて、どんな感じがするだろうか。短く言い切った簡潔な表現で、リズムがあつて、親しみやすい感じがするのではないだろうか。

このように、文字で書かれた言葉は当時のままで残っているが、言葉は人間の生活の仕方と共に変化してゆく。話し言葉の変化につれて書き言葉も変化した。書き残されている昔の言葉や、現代の言葉と比べると、いろいろな点で違っている。そこで、『竹取物語』の原文のような昔の言葉を**文語**(または**文語文**)、現代の言葉を**口語**(または**口語文**)といつて区別するようになった。

文語が用いられた主な時代は、奈良時代から江戸時代までである。その間に、話し言葉が移り変わっても、平安時代中期の言葉を使って文章が書かれることが多かった。そこで、文語文といえは、普通、平安時代中期の言葉を基本とすることになっている。

また、言葉には一定のきまり、即ち文法がある。文語の一定のきまりを**文語文法**という。文語文法も平安時代中期の言葉のきまりを基本として成り立っている。文語は、古人が書き残し、愛読してきた古典に用いられている言葉である。だから文語文法は、**古典文法**とも呼ばれる。

2. 口語と文語の主に違つ点

- (1) 文語には口語に見られない言葉がある。

竹取の翁といふ者ありけり。